inlonely

double quarter

僕は昔から人付き合いが苦手だった。子供の頃から学校では多くの時間を一人で過ごしてきた。だから趣味も読書やピアノみたいな、一人で黙々とすることばかりだった。

いつからだったのかはわからない。本当に小さいときは平気でみんなと遊んでいた気がする。でも気がつけば人と話すことに躊躇するようになっていた。対人恐怖症の一種かとも思ったが、発表や話し合いの場面では一応人並みにこなせてはいた。ただ人と目的のない会話を交わすことは避けるようになっていた。

そんな状況でも話しかけてくれる人ももちろん居た。僕も最初のうちは普通に話せていた。でもあまり関わりの無い人とは何を話したら良いかわからなくて、しばらくすると話題も尽きてしまうことがほとんどだった。積極的に受け答えをしないことがさらに人を遠ざける原因になって、余計に人と話さなくなっていった。

そもそも彼らには僕よりずっと親しい人がいたのだ。だから僕に見切りをつければ彼らはあっさりと引き上げていった。いつだって僕はどの輪の中にも入っていなかった。僕はそのことに文句を言うほど厚かましくはなかった。

そもそも僕はそのことをあまり不幸には感じていなかった。依然として必要なときは人と話せるし、学校では周りに良く知る人がいるから不安もなかった。きっと、僕は深い関わりを持たなくても生きていけるのだ、と思った。それでいいのだと思いながらも、僕はずっと独りだった。

気付けば僕は仕事に就いていた。そこそこ良い大学も出たし、面接も準備さえすれば人並みにはできた。だから仕事や待遇にも満足している。必要最低限のコミュニケーションはできるから仕事中も困らなかった。だがプライベートでの人付き合いはほとんど無かった。近寄りがたい雰囲気を出してしまっているのか、それとも自分から避けているのか、どっちなのかは自分でもよくわからなかった。

しかしプライベートの人付き合いが全くないわけではなかった。同期とは少し仲良くなれた。そのうち何人かとはたまに食事にも行くし、お互いのことも色々と知れた。だが彼らにはもっと仲の良い人がいることはわかっていた。今までと同じ。だがそれで良いのだと満足しようと思った。

大きな仕事に一区切りがつき、会社の人との飲み会に参加することになった。今までも何度か飲み会は経験していた。僕はお酒は飲まなかったが、みんなが楽しそうに話しているのを見ているだけでも十分楽しかった。だから飲み会は嫌いではなかった。

「じゃあ俺はあっちの人と話してくるから。一区切りついたら戻ってくるよ」

「うん、それじゃ。車は出してあげられるから、好きなだけ飲んでくるといいよ」

仲が良い同期の一人とちょっとした他愛ない話をして、彼が別の集団と話しに行くのを見送る。そして僕はお酒を飲まないから車で家まで送る、これがいつもの流れだ。彼は誰とでも仲良く出来る人で、彼がいる場所は

いつも笑いが絶えなかった。同期というだけでこれだけ良くしてもらっているのが申し訳ないくらい、彼はできた人物だった。
気がつくと僕と仲が良い他の人も様々な集団に交じったりもっと仲が良い二人で話したりしていた。僕はそれを眺めながらグラスに残ったコーラを飲み干した。話しているうちに氷が溶けて味が薄くなっていた。
追加のコーラを頼もうとして目で呼び出し機を探していたところ、少し離れたところで会話が一区切りついたのが見えた。その中には僕が苦手な上司もいて、どうやらこっちに向かってくるらしいのもわかった。僕は普通人を嫌いだと思ったりはしないのだが、かの上司は僕がお酒を飲まないのをやたらと気にしてやんわりと勧めてくるので、飲み会の場では苦手だ。
そんなわけで逃げ場所としての会話相手を探そうとしたところ、一人で飲み食いしている女性がふと目に入った。見かけたことはある気がするが、多分話したことはない。誰とも話していないのにそのことに不思議なほど気後れしていない彼女の様子がどこか気になった。
しれっと人混みを抜け出して彼女に近づいていった。
「隣、座っていいですか？」
そう聞くと彼女は特に驚きもなくコクリと頷いた。それを受けて隣に座り込み、店員にコーラの追加を頼んだ。ついでにと彼女は烏龍茶を頼んだ。店員が去ったあとまた無言で飲み食いを始めた彼女に、何か話しかけなければという焦りを感じた。
「お酒、飲まないんですね」
「……必要がないから、かな」
その端的な返答に、どこか彼女の生き方が感じられた気がした。想定していなかったあまりにもあっさりとした一言に面食らっていると、彼女が目でそっちはどうなのか、と促してきた。
「僕も似たような感じです。お酒の味が好きじゃないってのもありますけどね」
その返答に彼女は頷き、また皿に目を落として唐揚げを食べるのを再開した。
しばらくの無言の後、店員が注文していたコーラと烏龍茶を持ってきた。
「同じ会社なのに僕たちってほとんど面識がありませんでしたよね」
「普段は部署が違うからでしょうね。今回は結構大きいプロジェクトだったから」
彼女は積極的に話を広げようとはしなかった。気まずいのはどうやら僕だけのようだ。彼女はさっき見つけたときと同じように、全く気後れしていない。自分から話題を出して話すのがこんなに難しいとは。いつもの会話は相手にどれだけ体重を預けていたのかと思って、自分が情けなくなる。
「えっと……普段って何されてるんですか？」
つい焦ってお見合いみたいな話題を振ってしまった。焦った結果さらなる焦りを生み出した僕の様子を見て、彼女は微笑しながら、
「気を悪くしないでほしいんですが、別に無理に会話しなくても大丈夫ですよ？　私、黙っている時間も好きです」
と言った。それは僕の焦りをからかっているというふうでもなく、純粋にこちらへの気遣いだった。
見透かされてしまった恥ずかしさと、肩の力が抜けた安心感とが入り交じっているところにコーラを流し込んで誤魔化した。そして僕が「ありがとうございます」と小声で言うと、彼女はまた頷き、二人は黙々と飲み食いを再開するのだった。

別の集団から話しかけられそうになるたびに、二人でそれとない会話をして彼らを遠ざけた。それがどこかいたずらをしている時の気分と似ていて、こらえきれずクスクスと笑いながら、周りの騒がしい会話を二人黙って聞いていた。

その後も大人数で集まる打ち上げがあるたびに、僕は決まって彼女の隣に座るようになった。そのたびに二人でほとんど黙ったまま人の会話を聞くともなく聞いていた。それは心地よい沈黙だった。

「……私がどうして話さないのか、聞いてこなかったのはあなたが初めて」

何度目かわからないが、そんなことを繰り返していたある日、彼女から急にこんなことを言われた。彼女の方から話しかけてくるのは珍しいことだった。

「……多分、僕はその感覚を知っているからです。なんとなく、わかるんです」

僕はどうして人付き合いが苦手なのか、そのことは当然ずっと考えていた。今までは人ができることができない、ただの下手くそだからだと思っていた。確かにその側面はあった。だがそれ以前に僕は人と話すことがあまり好きではなかったのだ。そのことに最近になって気付いた。黙って人の話を聞いているのが好きだったのだ。

すると、彼女はグラスに目を落としてこう言った。

「私、実はinlonelyなんだ。inlonelyって何か、知ってる?」

「聞いたことはある気がするけど……ごめん、良くわからない」

「そう」

しばらくの沈黙の後、顔を上げた彼女は遠くを見るような目をして続けた。

「孤独を感じない人のこと。ずっと一人で居ても孤独に苦しまないし、感じようとしても感じられない。生まれつきそうなの」

それを聞いて、僕は何と言えばいいのかわからなくて黙ってしまった。彼女は僕の沈黙を待った。

彼女だって今までの人生ずっとこの個性と付き合ってきたんだ。僕が今更何を言おうと浅い言葉にしかならない。それにもう自分の中である程度心の整理がついていることだろう。だから慰めようとも思えなくて、かといって軽く受け止めるのは失礼だと思った。

「……どうして話してくれたんですか?」

ようやく出てきた言葉がこれだった。僕はこの話題に正面から立ち向かうのを諦めた。

「あなたも同じかもしれないと思ったから。失礼だったらごめん」

「そう、なんでしょうか」

なぜか自分もそうだと断言はできなかった。僕は今まで自分がうまく人と関わることが出来ないということばかりを気にして、実際自分が孤独なのかどうかは考えていなかった。だから急にそう問われると答えられなかった。

だがもし孤独を感じられないのであれば、人と積極的に関わろうという本来であれば自発的な動機が失われ、その積み重ねで結果的に周囲と比べて劣ったコミュニケーション能力になっているのは頷ける話だ。

それに、孤独になったことがないというのは確かにそうだった。僕は別に誰かの一番じゃなくても良かった。僕の中で人付き合いの意味は孤独を紛らわすためではなく、孤立による不利益を避けるためのリスクヘッジだったのではないだろうか。そうだとすれば今までの自分の行動に全て納得が行く。

「そうかもしれません」

そう一言だけ続けて、二人はまた口を閉ざした。今日はなんとなくお酒が飲みたい気分だった。

そんな会話をした翌日、酔いが覚めた頭でinlonelyについて調べた。

人類は狩猟採集時代から共同体を形成して、協力することで強大な動物に立ち向かってきた種だった。そこから長い時は経ったが、生物の進化の歴史からすれば微々たるもので、共同体に属していた頃の習性は現代にも残っていた。

その習性の一つが孤独という感覚だ。共同体に属せないという生命の危機に対して、精神的苦痛という形でシグナルを送るシステムが孤独である。それは生命の危機を知らせるという意味で身体的な痛みに対応するものだ。だからこそその苦痛は耐えがたく、逃れがたい。

自然淘汰の結果として、当然孤独を感じなかった人類の多くはその遺伝子を後世に残せなかった。だから現生人類は皆孤独を感じる。

しかしそれは自然淘汰が働いていた時代の話に過ぎない。現代の発達した福祉社会の手によって、本来生き残れる可能性が限りなく少なかった人も生きられるようになった。その結果、先天的に孤独を感じにくい、あるいは全く感じない人々が産まれ、社会の中で一般人として暮らせるようになった。

元々はスキゾイドパーソナリティ障害とみなされていたそれは、気付けばマイノリティの個性と呼べるまでにその人口を拡大していた。それもそのはずで、発生原因が違っているのだから人口に占める割合も違うのだ。決定的な相違は、inlonelyの人々のほとんどが先天的であることだ。スキゾイドパーソナリティ障害の人々とは異なり、幼少期などに何ら抑圧された経験がなくとも、彼らは孤独を感じず、またそれ故周囲への関心を感じにくい。

多くの場合十代のうちに親によって発見されるか、本人が自覚して検査を行うことで発覚する。遺伝疾患であり治療方法は存在しないが、大抵の場合社会生活には問題は無い。現代社会では個性の一つとみなされることもしばしばある。

このようなことが書かれていた。

調べていくうちに、自分もinlonelyなんじゃないかという思いが強くなっていった。自分の感じている苦しみは周囲との感覚の違いだったのだと考えると、納得と同時にどこかほっとした感覚があった。自分のせいではなかったという言い訳ができるようになったからだろうか。それは少しずるい気もするが、でも過去の自分が救われたような気がして嬉しかった。

あれからも何度か二人の奇妙な関係は続いた。毎回少ししか話さなかっ

たが、お互いのことが少しずつわかってきた。好きな食べ物とか、今読んでいる本。そして好きな音楽。
「僕は子供の頃からピアノが好きで、その影響でクラシックを良く聞くんです」
「私も。誰の曲が好き？　私はショパン」
「僕は……ドビュッシーかな。『月の光』が好きで。なんとなく、孤独を肯定されている気持ちになれるんです」
そう言うと彼女は少し不思議そうな顔をしてこう言った。
「孤独であることに苦しむ必要なんてないんじゃない？　沢山の人に囲まれていても孤独を感じる人がいるのと反対に、たった一人でも孤独にならないのが私たちinlonelyなんだから」
話しているうちに彼女は自分がinlonelyであることを肯定的に捉えているらしいこともわかってきた。
「孤独に煩わされないってことは、人間関係に煩わされないってこと。それって一番身軽で一番楽な生き方じゃない？」
これが彼女の持論だった。
「ええ、そうでしたね。僕はもう一人を孤独だと思わなくてもいい」
そうやって彼女が彼女自身を肯定しているのと同時に、自分も肯定されて救われていた。だがその安心感と同時に、自分への疑いが芽生え始めた。
果たして自分がかつて感じていた苦しみは本当に孤独ではなかったのか。自分は孤独に苦しんでいるのだと思い込んでいた期間が長かったせいか、どうにも孤独とそれ以外がうまく分けられないのだ。
目の前の彼女を見ていると、人とうまくやっていけていないことへの悩みすら抱いていないように見える。それがinlonelyとして正しい在り方なのだろうか。
今でこそ、一人で居るのは悪いことだと思い、その苦しみを孤独だと勘違いしていたのは、他人がみんな一人じゃなかったこと、つまり周囲と自分との違いが原因だったと思っている。だがそれは実際全くの孤独ではなかったと言い切れる自信が僕には無かった。

日は移り、また同じように二人で黙っていたときの事だった。
「私、転勤することになったの。だからこうして会うのは最後になるかも」
あまりにもあっさりした宣言に、僕は咄嗟の一言が出てこなかった。
「私にだってやっと仲良くなった人と離れるのはちょっと寂しいって気持ちはあるよ。でもね」
彼女はまたいつも自分を、いや二人を肯定するときと同じ、強く美しい表情をした。
「私は身軽に生きていくって決めたから」
それは言外に僕との関わりをここでやめにするということを表明していた。想いも、言葉も、感情も追いつかないまま、ただ何か会話のとっかかりを探すように目を泳がせた。
僕は僕がショックを受けていることにショックを受けていた。彼女とたまに過ごす時間が自分の中でこんなに大きくなっていたということに、自分でも気がつかなかった。まだ、終わって欲しくなかった。だがそれを伝えるにはあまりにも彼女の表情が透き通っていて。
「そっか。そう決めてるなら僕も寂しいけど応援するよ。大変なこともあると思うけど、あっちでも元気でね」

皮肉にも、このとき僕を救ったのは周囲に馴染むために自分を取り繕う癖の方だった。僕の中にあったはずの inlonely の方は全く機能せず、ただ突然の決別に打ちひしがれるだけだった。

彼女にとって僕は少し仲が良いだけの、都合の良い隠れ蓑に過ぎなかったのだろうか。身軽に生きて行くための隠れ蓑。それに対して僕は彼女のことをそうとは割り切れなくて、でもその事実を認めたくもなかった。認めてしまえばきっとまた僕の中に孤独が生まれてしまうだろうから。

そこからのことはよく覚えていない。ただその日僕は家に帰ると、初めて酒を浴びるほど飲んだ。どうしてそんなことをしたかは自分でも良くわからなかった。気持ち悪くて、二度とこんな飲み方はすまいと思った。

それからは驚くほどいつも通りの日々が続いた。まるで彼女が最初からいなかったみたいに、周りはいつも通りだ。一人の物語なんて、全体から見れば小さなものだ。それは当たり前だった。

「なあ、やっぱりお前最近調子悪いんじゃないか？」

いつも僕を気に掛けてくれる、仲の良い彼を除いて。

「そう見えるかな。そうかも」

原因は予想がついていたが、それを言う気にはなれなかった。

「はあ。もう少し自分の気持ちに素直になれって言ってやってるってのに」

「え？」

「彼女との関係、誰も気付いてないと思ってたのか？　お前はそんな目立つタイプじゃないからそこまで噂は広まってはないけど、気付く人はすぐ気付いたぞ」

「そんなんじゃない！」

自分でも驚くくらい語気を強めてしまった。彼もさすがに面食らった表情をしていた。でも、本当にそんなんじゃないんだ。自分でもわからないよ。

「……からかって悪かった。でも心配してるのは本当だからな。今晩どこかに食べに行こうぜ。奢るからさ」

「……ごめん。ありがとう」

声を荒げたのはいつぶりだろうか。最近、自分の中でらしくない感情ばかり巻き起こっている気がする。

怖かった。自分が変わっていくことそのものがじゃない。自分が変わっていって、見たくなかった黒いものが見えてしまうことが。

常に頭の片隅にもやがかかったような思考の中、それでも仕事は問題無く終わらせて、夕飯の時間になった。僕がタイムカードを切るタイミングでちょうど彼も仕事を終えてこっちに向かってきた。

「その、さっきはごめん」

「いや謝るのはこっちの方だ。謝って欲しくて誘ったわけじゃないんだからもう気にしないでくれよ。それにお前の深いところに触れられた気がして少し嬉しかったんだぜ？」

それから僕たちはいつものように他愛ない話をしながら――僕はほとんど聞くだけだったが――行きつけの居酒屋に向かった。

「生一つ！　そしてお前はコーラだったよな。コーラ一つ！」
「ありがとう」
彼との間に珍しく少しの沈黙が訪れた。これは居心地の悪い沈黙だった。
飲み物が運ばれてきた後は、乾杯して互いに飲み物を一気に喉に流し込んだ。
「……で、早速本題なんだが。お前は彼女に会いたい気持ちってあるか？
上に掛け合えば異動先くらい教えてくれるはずだ。ストーキングしようってわけじゃないしな」
昼間の会話の時点である程度趣旨は察していたが、まだ自分の中でも考えがごちゃごちゃしていて、返事に難儀した。
「多分、ある。でもきっと迷惑だから」
そう言うと彼は少し悲しそうな目をした。
「もう私とは会うなって言われたのか？」
「そうじゃない、けどそんな感じのこと。彼女は身軽に生きて行きたいから、って」
「なるほどな」
彼は次の言葉を選んでいるようだった。やがてその言葉が紡ぎ出された。
「前々から思ってたんだが、お前は人の気持ちを気にしすぎていると思うんだ。お前が自分の気持ちを伝えてくれるっていうのは、いつも俺を尊重してくれているのと同じくらい嬉しいことなんだ。言っただろ？　今日のことも嬉しかったって。もっと自分がしたいことを主張してもいいと思うんだよ。譲るだけが優しさじゃない」
「自分ではそんなつもりなかったんだけど」
「そりゃそうだ。それが身体に染みついてれば普通にしか感じられないだろう。でも人間関係っていうのは相手の求めに応じるだけじゃなくて、自分も相手に求めていかないとラリーが続かないんだよ」
言われてハッとした。僕は今までできるだけ波風を立てないように、人に嫌われないように生きてきた。だがそれは相手を傷つけてしまうこと、いやそれにより自分が傷ついてしまうことを恐れていただけだったのだ。自分が傷つくことを厭わず、一歩踏み出すことこそが僕には必要だったんだ。それができなかった僕はきっと優しい人間なんかじゃなくて、完璧主義の卑怯者だったのだろう。
「俺はお前とある意味で逆だった。昔はおしゃべりすぎたり積極的すぎたりして嫌われることも多かった。でもお前はちゃんと俺の話を聞いてくれて、しかもそれが嫌そうじゃなくて。そんな風に話せたのはお前が初めてだった」
「……」
彼がそんな風に考えていたとは思わなかった。今までずっと、僕は彼の同期だからというだけの理由で良くしてくれるのだとばかり思っていた。
「お前は自分のことを人と関わるのが苦手な人間だと思っているかもしれないが、俺はそんなことないと思うぜ。お前は他の人と少し得意な関わり方が違っていただけだ」
その言葉に救われるのと同時に、いつか芽吹きそしていつの間にか忘れていた自分への疑惑が決定的なものとなってしまった。僕は本当にinlonelyなのか。以前彼女に言われた「孤独に苦しむ必要は無い」という言葉と彼の言葉が重なる。
そう、僕は静かに人の話を聞いているのが好きだったのだ。誰も傷つけ

ないから、自分も傷つかない。今になって思えば卑怯なことだが、それでも僕はこれが好きだった。
彼の言うとおりだった。人と関わり方が違うだけで、僕は決して人を嫌いではなかった。むしろ、人がいないと孤独だったのだ。だから、彼の言葉はまさしく僕の inlonely の否定に他ならなかった。
自分を支えてきた、これからも支えていくはずだった inlonely という柱を失って、僕は視界が歪むような錯覚を覚えた。決定的な一撃をたった今与えられた。独りでも生きていけると、彼女がいなくても生きていけると、そう信じるための心の柱を失ったのだ。
だがきっとそれは、遅かれ早かれ気付いたであろうことだった。いつまでも自分を誤魔化し続けることなどできはしないのだ。
「……彼女が inlonely なの、知ってた?」
受け入れがたい現実に対し、僕がとった行動は最適で、最悪だった。
「なんとなくその可能性を考えてはいた。本人からそう言われたのか?」
「そう」
今まで通り、自分からは踏み出さないという結論。
「彼女は言わなかったけど、きっとそのことに苦しんでもいた。でも最後に彼女が語った決意はあまりにも美しかった。彼女は自分らしい生き方を見つけたんだ。彼女の気持ちを踏みにじるようなことは、僕にはできない」
孤独を自覚してなお、踏み出さない。
「そうか……」
彼は彼女の気持ちを、ひいては僕の気持ちを踏みにじろうとは思わなかったようだった。
これが僕の言うべきことだった。だが全く僕の言いたかったことではなかった。本当は、彼女が居なければ僕は孤独なのだと言ってしまいたかった。
あぁ、僕はいつもそうだ。せっかく僕を暗闇から連れ出す手を差し伸べてくれる人がいても、僕はここが居心地が良いんだと言って、追い返す。ただ変化が、外の明るさが怖いだけなのに、暗闇が好きなふりをして生き続ける。
口をついて出てくるのは自分が暗闇に留まるための理路整然とした理屈だ。自分さえそうだと言ってしまえば、誰も彼もそうなのだと納得するしかない、綺麗な理屈。だがそれは自分の本心とはまるで違っていて、どうしてそうやっていつも追い返してしまうのかもわからなかった。何より、これからもずっとそうやって生きて行くのだと考えると薄ら寒い思いがした。
もう、取り返しがつかないところまで来てしまった。
「もしかしたら、僕も同じ inlonely なのかもしれないんだ」
取り返しがつかないから、僕はもうここで生き方を決めるしかなかった。だから、嘘をついてでも僕は inlonely でいようと思った。そうでないことに耐えられないから。いや、耐えられていると周りに見せかけるためなのかもしれなかった。
今まで生きてきた中で、人と関わることに苦労してきたこと。ずっと周囲とのずれに苦しんでいたこと。それらしい根拠を過去の記憶から引っ張り出して並べていった。
「……そうか。話してくれてありがとう」
彼は最後まで話を遮らなかった。そして僕の言ったことに一切反論してこなかった。お前は人との関わり方が他と違うだけで、孤独を感じていな

いわけではないと、言い返すこともできたのだ。だが彼は自分がinlonelyのことを良く知らないと思っているのか、はたまた僕の独白に真実味を見いだしたのか、わからないが何も言い返してこなかったのだ。

あぁ、彼を納得させてしまった。自分で決めたはずのことなのに、自分の気持ちが隠せてしまったことがこの上なく悲しかった。

「でも、俺はそれでもお前に友達でいて欲しいと思ってる。お前が決める生き方だから、無理強いはしないけどな」

僕もこの関係を失ってしまうのは怖かった。それが孤独を恐れる気持ちであることはすぐにわかった。

「僕は、彼女と居る時間が好きだった。ただ黙って他の人の話を聞いているのが好きだった。だから、君の話を聞いている時間も好きだった。だから、これからも関係は変わらないよ」

そう言うと彼は安心した顔を見せた。僕も彼に安心した顔を見せられているだろうか。気持ちを、表情を取り繕えている自信がなかった。

その日はこの会話の少し後に解散した。帰りの電車で、僕は自分で決めて自分で背負ってしまった生き方に、後悔しつつも少しずつ整理がついてきた。

きっと僕は彼女のように生きられたらと思っていたのだ。彼女と過ごす時間以上に、彼女の生き方そのものに恋をしていた。彼女の生き方はあまりに静かで強くて、そして美しく見えた。

自分が生きて行く道に自分だけを背負って、自分だけの人生を歩んでいく。そこに孤独や人間関係の苦しみは無い。

対して僕は傷つくことを恐れて、でも孤独は怖くて、だから卑怯な方法で人々にすがりついていただけだった。そんな僕だったからこそ、彼女の生き方が羨ましくて、僕は嘘でもそれを追いかけたかった。

でも僕はinlonelyじゃない。あまりにも孤独だ。そして彼女を知った日から、その孤独は決定的なものになった。だから心には矛盾が残り続ける。どんなに願おうと僕の中の孤独を消し去れはしない。でも孤独を誤魔化すための唯一の方法は、孤独が消え去るように願い続けることだけだったのだ。

もちろん遺伝子検査で本当にinlonelyかどうかを調べるなんてことはする気になれなかった。もしinlonelyじゃないと確定してしまえば、どうにかなってしまいそうだったから。

狂ったふりをして生きていればいつか本当に狂ってしまうように、孤独でないふりをして生きていればいつか孤独を忘れられると信じて。

彼女はきっと僕を裏切らない。ずっと一人で、でも孤独ではないままに過ごしてくれる。だから僕も彼女を裏切らないように生きるのだ。

僕はあなたのようになりたかった。